



SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS

2030年に向けて
世界が合意した
「持続可能な開発目標」です

アグリ高島



○ ベんがらモリブデン被覆種子による 水稲直播栽培

水稲の直播栽培は育苗を行わず、直接水田に播種するため省力的ですが、苗立ちの安定化が課題です。べんがら（酸化鉄）と三酸化モリブデンの混合物を稲の種子に被覆すると、比較的資材費が安く、簡単に、苗立ちを安定化させることができます。



注目!

「特A」ランクの米をたくさん穫ろう!

令和元年産米の「みずかがみ」と「コシヒカリ」は、日本穀物検定協会の食味ランキングで最高位の「特A」と評価され、需要が高まっています。一方、高島市の水稻の平均単収は滋賀県平均単収よりも10~20kg/10a低くなっており、需要に応えるためには栽培方法に改善の余地があります。

まずは適切な水管理と施肥方法の基本を改めて見直しましょう。そして、適期収穫で玄米タンパク質含有率 6.5%以下、整粒歩合 80%以上、単収 540 kg/10a以上を目指しましょう。

1. 水管理

1) 浅水管理 (苗の活着後~中干し開始)

分けつ期に、深水管理すると水温が上がらず、株元に光が届きにくくなり、分けつが抑制されます。土が水面から出ない程度(水深3cm)の浅水状態を保ち、茎数を確保しましょう。

2) 中干し (目標茎数の8割確保~幼穂形成期)

無効分けつを抑制し、収穫直前まで入水可能な田面の硬さを確保するため、しっかりと中干ししましょう。

3) 常時湛水 (出穂3週間前~3週間後)

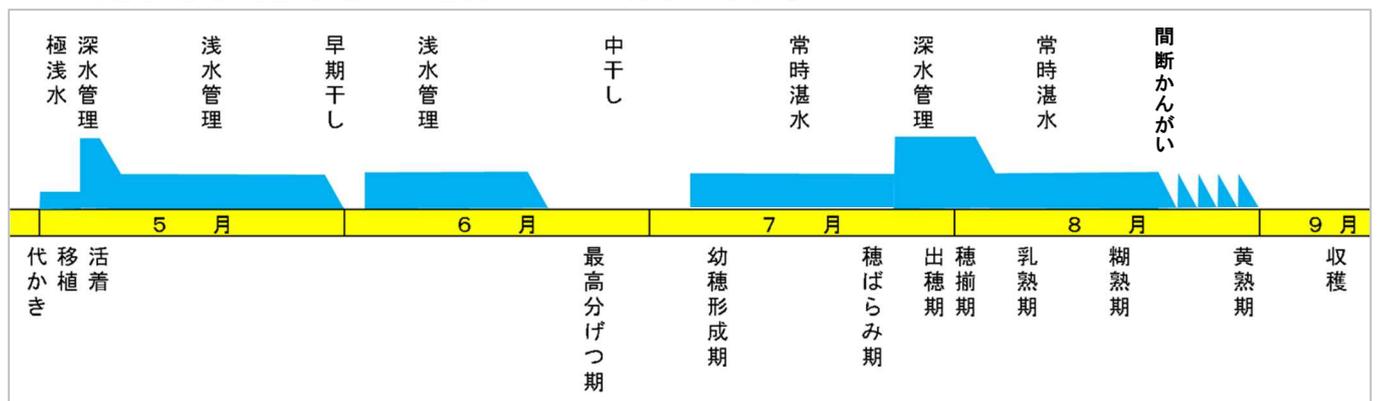
出穂期前後は、最も水を必要とする時期です。水が不足すると、未熟粒の発生で品質が悪くなるだけでなく、登熟歩合が低下し収穫量も減ります。水を切らさないように管理し、収量と品質を確保しましょう。

4) 間断かんがい (出穂3週間後~黄熟期)

米粒は、収穫直前まで太り続けます。水が不足すると米が細くなり、胴割米の発生で収量と品質が低下します。このことから、落水は、収穫作業に支障がない範囲で遅らせ、地表面が乾きすぎる場合は走り水程度のかん水をしましょう。



中干しの様子



2. 追肥 (早生品種: 6月上旬~中旬、中生品種: 6月中旬~下旬)

移植時に、基肥一発肥料を利用した場合でも、施肥量が予定よりも少なくなってしまう場合や、葉色が薄く茎数が少ない場合は、10a当たり窒素で2kg程度追肥しましょう。

3. 穂数確認 (出穂期~収穫期)

高島市の水稻の単収が低いのは、過度な疎植が原因の一つと考えられます。坪50株植で27本/株、60株植で22本/株の穂数が確保されていない場合は、来年の栽植密度を一段階高めてください。現状に比べて2割増し程度の苗が必要となりますが、苗のかき取り量を一株3本の細植えにすることで苗の箱数を減らせます。

たまねぎ栽培のすすめ ～水稲との複合経営で安定を目指す～

近年、人口減少や高齢化、生活スタイルの変化により、米の需要が減少しています。その一方で、総菜や外食店等で使用されるカット野菜などの加工・業務用野菜の需要が高まっています。これら加工・業務用野菜を利用する企業等の多くは国産野菜を求めています。現状の国産割合は7割程度で、需要を十分に満たしていません。このような中で、当課では水稲+野菜の安定した複合経営の定着を目指して、水田を活用した野菜栽培を推進しており、なかでもたまねぎ栽培の導入をおすすめしています。

■加工・業務用たまねぎ栽培のメリット

- 水稲との作業競合が少ない。
- 定植から収穫・出荷まで機械化が進んでおり、重労働が少ない。
- 一部のJAでは作業機械の貸付体制が整えられており、設備投資なしに取り組むことができる。
- 大型の鉄コンテナに収容して出荷できるため、箱詰めの手間がかからず、重い箱を人力で運ぶ必要もない。
- 出荷規格が簡素で、選別・調整が楽。

■10aあたりの収支

売上※	220千円	4,000kg 出荷の場合
経費	159千円	購入苗 50千円 肥料 29千円 農薬 22千円 機械借上料 14千円 出荷調整費 40千円 販売手数料 4千円
補助金	35千円	産地交付金 (R元年実績)
所得	96千円	
労働時間	41時間	

※売上は、R元年実績の価格 55円/kg (税込) より計算。価格は変動することがあります。



収穫機

掘り上げ、葉切り作業を行います



ピッカー (拾い上げ)

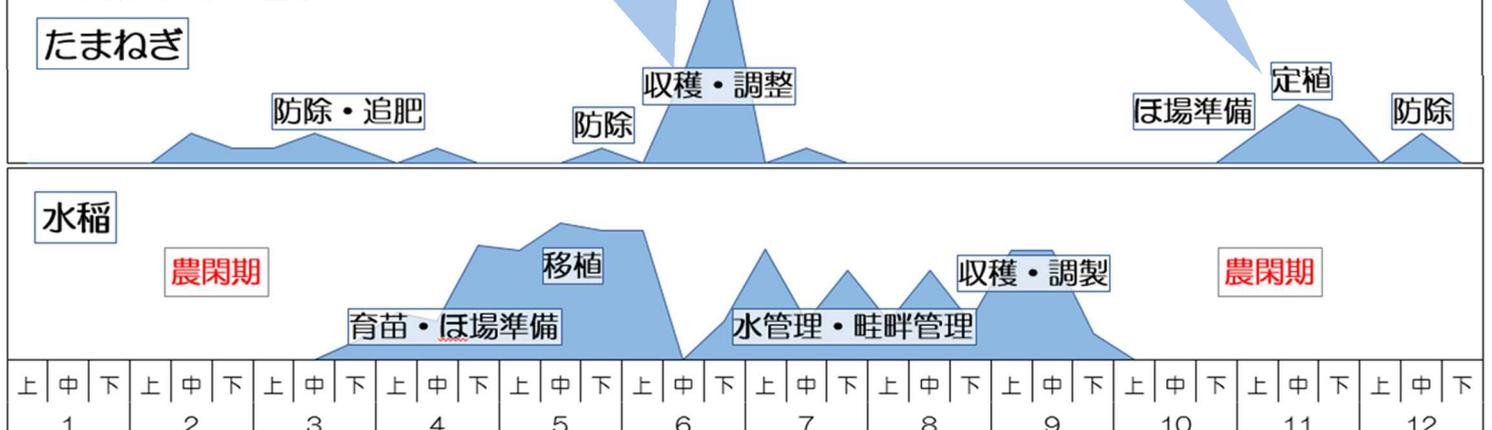
収穫機で掘り上げたたまねぎを拾い上げ、コンテナに入れます



全自動移植機

購入した苗を4条に自動で植え付けます

■作業時期の目安



興味のある方は、農産普及課また各JAまでご相談ください。

功労者の紹介



黄綬褒章受章

井上 四郎太夫氏（今津町）令和元年秋の黄綬褒章

令和元年 11 月 3 日の伝達式で受章されました。

井上氏は、地域の耕作者不在の農地を借り受けて規模拡大を進められました。農業経営を行うには極めて条件の悪い地域でしたが、その気象条件や立地条件を逆に活かして、雨よけトマトの特産化や子牛の肥育による複合経営を確立されました。

高齢化で農地の荒廃が危ぶまれると、集落営農組織を発展させた有限会社を設立し、山間地農業の発展に貢献されました。住民の信頼も厚く、地域の要職も務め、リーダーとして地域の発展に貢献されてきました。また、I ターンの担い手育成にも取り組まれています。



京都新聞・優秀農家表彰受賞

令和元年 5 月 29 日に京都新聞主催の第 57 回優秀農家表彰で、2 名の方が表彰されました。

田村 勇氏（安曇川町）滋賀県土地改良事業団体連合会長賞

田村氏は、地域に根差しつつ、集落・地域のリーダーとして稲 WCS の団地化や後作のそば栽培、環境こだわり農業の推進に貢献されてきました。このことにより、藤江地区の農業者のほとんどが稲 WCS の栽培や環境こだわり農産物の栽培に取り組むきっかけとなっています。

さらに、たかしま有機農法研究会の主力メンバーとして雑草対策など栽培方法の確立に尽力され、地域の有機農業を牽引してこられました。経営規模の拡大だけでなく、地域のことを考え、地域とともに地域に根差した農業を実践されています。



井口 幸太郎氏（安曇川町）滋賀県町村会長賞

井口氏は、実家の農業を継承するため民間会社を退職し、滋賀県立大学校就農科で野菜の栽培技術を学び、平成 24 年に就農されました。就農後は日々の農業への取り組み姿勢から周辺の農家の信頼を得て水田が集まるようになり、水稻＋野菜の複合経営を確立されました。環境こだわり農業やグローバル GAP、少量土壌培地耕等の先進的な技術に積極的に取り組まれ、地域の見本となっています。

また、若手担い手の一人として建設的な発言を積極的に行い、地域農業の発展に寄与されています。



発行

滋賀県高島農業農村振興事務所農産普及課（〒520-1621 高島市今津町今津 1758）
TEL 0740-22-6025~6028 / FAX 0740-22-3099
Facebook ページ「キラリ高島農業」
(<https://www.facebook.com/takashimanounou/>)

